R5.5.13

芽室サテライト

とかち熱中小学校 vol.01

大宮　透
小布施町役場（総務課長/総合政策室長）

小さな町は全国の縮図

人口２万人以下自治体は全国の約45%。
小さな町だからこそ、役場外とのつながりが重要である。町民はもちろん大学や町内外企業、どんな事業でも関わりを増やしたい。そんな中で大切にしているのは関係性作りだと言う。外枠のつながりだけでなく、電話１本で提案しあえる様な距離こそが協働の始まり。全国の半数近くを占める小さな町の1つだからこそ、モデルになる取組をしたい。

小布施若者会議

大宮氏が手掛けた「小布施若者会議」は35歳以下が集い、日本や地域のあり方、地域ビジネスのアイデアを考案する。2泊3日の日程で、まちを知り、構想し、発信する。
題材を扱う上で大切なのは、世間一般に重要な課題であること。地域には大事な内容でも、その他大勢が想像し難い内容では、参加者が集まらない。
グループワークでは、1班5～6人にするとベスト。10人以上になると、発言をしにくい状況になりやすい。つまり、新しい意見が生まれない。
また、町内外から100人規模の人数が集まるため、小布施を知らない人も当然参加する。そうすると小布施に詳しい人が、自然とリーダーとなってくる。
この環境で生み出されたアイデアは、実行され、多くの成果を残している。

ワークショップのこつ

経験があると、始まったとたん紙とペンを持って動き出せる。ワークショップには意見をとにかく多く出す「拡大」の時間や、出た意見をまとめる「収束」の時間など行程があると言う。そのノウハウを学びワークショップ経験者数を増やせば、内容も充実してくる。

「分からない」って言っていい

ただその一言でも成長だ。
クラスで先生が講義をするのは20分程度。あとは、生徒同士の教えあいの時間。先生には聞きにくくても、友達になら聞ける。教える側も勉強になるとはよく言われるが、そんな空間は協調性や協働性も生み出す。他の先生の授業でも生徒同士の交流が生まれてほしいと、先生同士で授業の"教えあい"を行った。気軽に聞きあえる関係を作ってほしい、それが先生の願い。

先生も探究

白樺学園で行う探究授業は地元課題という答えのないものに向かって生徒が取り組む。芽室町で行う「ジモト大学」に感化され、これを授業にしてしまおうと思ったのがきっかけ。活動中に地域や役場、多くの方々と生徒の間に関わりを持たせることができた。しかし、それは生徒だけでなく自分にも当てはまることだった。そこで自分も探究していたことに気づいた。人脈は人生の宝。

芽室まちなかサイクリング

午前中には課外授業としてサイクリングツアーを開催。天気にも恵まれ気持ちの良いものになった。
現役高校生ガイドにより、芽室本通から芽室公園、CaféBlancoや健康プラザを訪れまちなかを巡った。

編集後記

2人の講師に共通したのは「協働」の言葉。
協働を辞書で引くと「同じ目的のために2人以上が協力して働くこと」や、「同じ目的のために対等の立場で協力してともに働くこと」と記される。協働とはただ協力するだけではない、同じ目的である必要があるのだ。組織が同じ方角を向き、1つのことに取り組む。人は大なり小なり多くの組織に在籍するが、具体的に想像すればするほど協働とはかくも難しい。だからこそ、得られるものは大きいのかもしれない。